京まち工房

WINTER
情報交流誌
no. 45

（財）京都市景観・まちづくりセンター　ニュースレター

パートナーシップで進めるまちづくり

京町家の保全・再生 ニューヨークへ発信！
京都創生海外発信プロジェクト

京町家ニューヨーク公開フォーラム

MACHIYA REVIVAL

MISO（まちセン・インフォメーション・サテライト・オフィス）

町家の保全・再生の取組
～みんなの居場所としてのおおらかな器・でまち家～

京北の魅力を学び・伝え・活かすための
「スタディツアー」

子どもに地域への愛着を育む
～こどもまちづくりセミナー～

京町家まちづくり調査ただ今進行中！

（写真：水野克比古氏提供）

京町家の保全・再生 ニューヨークへ発信！ 京都創生海外発信プロジェクト

海外の人々に京都の魅力や素晴らしさを発信し、京都、さらには日本への理解を深めていただくために、「京都創生海外発信プロジェクト」を実施しました。

ニューヨークでは、ジャパン・ソサエティーと共催し、歴史的建造物の保全活動を国際的に行っている団体や活動家に京町家の価値を訴え、資金の確保も含めた保全・再生の方策について意見交換を行う、円卓会議や公開フォーラムを行いました。これをきっかけに、今後も継続的に情報交換や相互協力を行っていきます。

京町家ニューヨーク公開フォーラム

11月5日午後6時30分（日本時間11月6日午前8時30分）から、約100名の参加のもと、京町家の保全・再生に関する公開フォーラム「A City Under Siege : Saving Kyoto's Machiya from Destruction（包囲下の街：京町家を破壊から救おう）」を開催しました。京都の伝統的な建築様式と生活文化を伝える京町家の価値や、年々減少を続ける現状を伝えるとともに、アメリカの歴史的建造物の保存の実態について学び、今後の京町家の保全・再生の取組をさらに深めるために実施したものです。

熱心に議論を交わす出演者

まず、冒頭にジャパン・ソサエティーのダニエル・ローゼンブルム副理事長から、フォーラムの趣旨を説明していただきました。今回のプロジェクトのコーディネーターであり司会のローアー・イーストサイド・テネメント・ミュージアム創立者ルース・エイブラムさんからは、今回のプロジェクトに関わることになった経緯や京町家の保全・再生の重要性についての説明がありました。

次に、当センターの三村浩史理事長が、今回のプロジェクトの目的とこれまでの京町家の保全・再生の取組について説明を行い、「町家が消えていくことも危機だが、今後、持続的に受け継ぐための具体策を持ち合わせていない現状こそが危機である。次の世代にどのように伝えていくかが私たちの使命でもある」と、京町家を取り巻く状況について報告しました。

続いて、京町家の魅力や直面している危機的状況、現在進めている京町家の再生に向けた取組を紹介したドキュメンタリー映像「京町家の再生」を上映し、京町家についての理解を深めてもらいました。その後、NPO法人京町家再生研究会事務局長で京町家の居住者である小島富佐江さんから、ご自身の活動や京町家での暮らしについて、ご自宅の写真を交えて説明していただきました。小島さんは、「家は預かっているという意識を持って暮らしている。戦後、新しいものが良いとする時代があったが、今、木造の素晴らしい家に住んでいることを訴えていかないと京都の個性が失われ、京都が京都でなくなる、と思い、京町家の保全・再生に取り組んでいる」と自らの体験を通してのお話をされました。

京町家の優れた点を語る隈氏

建築家の隈研吾さんは、京町家の美学や地球環境という観点から語られました。隈さんは、世界的に活躍されている建築家の立場から、「日本の建築の要素を、アメリカの偉大な建築家が参考にしている。京町家を守ることは、京都だけでなく京町家に影響を受けた世界にとっても意義のあることである」と京町家の今日的意義や今後の可能性についてお話をされました。

そして、このプロジェクトの企画・立案者である、立命館大学のリムボン教授から、京町家の保全・再生の取組に関する課題などについて報告されました。リム教授は「日本はこれまで経済を優先させてきた。京町家の保全の必要性が言われ出して20年足らず、活動して15年。今回のニューヨークからのインパクトによって、京都が自分たちの持つものの大切さを再認識できると考えている」と語られました。

最後に、各出演者と会場の方々との意見交換が行われました。会場からは、「日本では国宝などの保全に熱心であるが、なぜ町家には適用されないのか」、「税制面の優遇の可能性はこれからあるのか」、「町家の住まい手の考え方を変えるにはどのようにすればよいのか」、「観光で京都に行ったが、町家については何も表示がない」、「若い人たちが町家に住むことはないのか」など、活発な議論が行われ、京町家への大きな関心が寄せられました。

フォーラム終了後のレセプションでも、多くの参加者が約1時間にわたり熱心に意見交換され、交流を深めました。

和やかな中にも熱のこもったレセプションの様子

市民や専門家も共に参加！京都創生海外発信プロジェクトスタディツアー

平成20年11月3日―11月10日（3日、6日、10日は移動日）

国際交流の推進や海外における歴史的建造物及び町並み、景観等の保全・再生についての取組への関心を高めるため、ニューヨークでの公開フォーラムの開催に伴い、スタディツアーを実施しました。また、京都市と姉妹都市であるボストン市も訪れ、京都市主催の国際交流イベントにも参加しました。参加した皆さんにとって、アメリカの歴史保存の事例に触れる貴重な機会となりました。

11月4日

午前：ローアー・イースト・サイド・テネメント博物館

アメリカへの玄関口だったニューヨークのローアー・イースト・サイド地区にやってきた様々な移民の暮らしを保存し、19世紀に建てられた共同住宅の中に1988年に設立された博物館の見学をしました。ここでは、学芸員が移民史について語るガイドが行われています。見学の後周辺地区の町並みを歩きました。

ローアー・イースト・サイド・テネメント博物館周辺

午後：円卓会議Ａ

「アメリカの歴史的建造物保存の発展と哲学」をテーマに、ワールド・モニュメント・ファンド（P11参照）やアメリカン・アカデミー・イン・ローマなどの団体代表者をはじめとする歴史的建造物保存の専門家から、これまでの経験や具体的な事例が説明され、日本とアメリカの制度の違いや京町家の保全・再生のあり方について活発な意見交換を行いました。コーディネーターのルースさんからの「京町家の破壊により、何を失うのか」という問いに、「形あるものを失うだけでなく、形のないもの、つまり心までなくしてしまうことになる」、「着物に例えれば絵模様は文化財、地模様が町家で、町家を失うことは地模様がない着物になる」など、日本側から発言がありました。また、アメリカ側から、京町家の保全・再生に不可欠なこととして、税制の優遇措置や助成金制度についてなど広く支援を呼びかけるツールが重要であるというアドバイスもありました。

円卓会議の様子

11月5日

円卓会議Ｂ

「歴史保存のための資金調達」について直面する課題や可能性について議論しました。アメリカ側からナショナル・トラストなどの手法や、保存活動への支援が地域にもたらす経済効果や、支援企業の対外的評価の向上につながることが説明されました。京町家の保全・再生に対する支援を得るための方向性や税制の課題を話し合い、「500万ドル（5億円）の資金の調達をする」という仮説を立て、活用案として「10軒の町家を購入したい」、「啓発活動に使う」などのアイデアが出されました。

11月6日

ニューヨークの歴史保存地区と町並み見学

ブルックリンハイツ歴史保存地区など、ニューヨークの歴史を物語る町並みや世界貿易センター跡地の最新プロジェクトを見学しました。

ブルックリンハイツ歴史保存地区を見学

11月7日

ボストン市表敬訪問及び意見交換会

ボストン市役所に表敬訪問し、今後の京都のまちづくりに活かすことを目的に、ボストン市の歴史保存地区や建築物の保全・活用の事例、「取壊し延期制度」等について説明を受けました。その後、来年の京都・ボストン姉妹都市50周年のプレイベントとして音輪会による雅楽公演会が京都市の主催で開かれました。

11月8日

ボストンの歴史保存地区見学

京都から移築された京町家が展示されているボストンこどもミュージアムを訪問し、その後、歴史保存地区において、高速道路の高架が撤去され、地下化した跡の地上部分を公園緑地化した事例等の説明を受けました。

ボストンこどもミュージアムの京町家

発言者：日本側
- 立命館大学産業社会学部教授　リム　ボン
- NPO法人京町家再生研究会事務局長　小島　富佐江
- 株式会社日本統計事務センター代表取締役　大久保　浩
- 株式会社ゼロ・コーポレーション代表取締役社長　金城　一守
- 京町家まちづくりファンド委員会委員長　大谷　孝彦
- 京都市都市計画局長　里見　晋
- 財団法人京都市景観・まちづくりセンター理事長　三村　浩史
- 財団法人京都市景観・まちづくりセンター事務局次長　寺本　健三

発言者：アメリカ側
- ローアー・イースト・サイド・テネメント・ミュージアム創立者　ルース・エイブラム
- ワールド・モニュメント・ファンド・プレジデント　ボニー・バーナム
- 史跡保存地区審議会エグゼクティブ・ディレクター　シミオン・バンコフ
- ナショナル・トラスト北東地域支部ディレクター　ウェンディー・ニコラス
- ニューヨーク州芸術協議会建築・計画・デザインプログラム・キャピタル事業ディレクター　アン・ヴァン・インゲン
- ワールド・モニュメント・ファンド・エクゼクティブ・バイス・プレジデント　リサ・アッカーマン
- 国連キャピタル・マスター・プラン・エグゼクティブ・ディレクター　マイケル・アドゥラースタイン
- アメリカン・アカデミー・イン・ローマ理事長　アデル・チャットフィールド・テイラー
- ニューヨーク・ミュニシパル・アート・ソサエティ・シニア・バイス・プレジデント　フランク・サンチェス
- ジャパン・ソサエティ副理事長　ダニエル・ローゼンブルム

（敬称略）

MISO
まちセン・インフォメーション・サテライト・オフィス

MISO（まちセン・インフォメーション・サテライトオフィス）が無事終了しました。

9月からスタートした、元西陣小学校でのセンターのサテライトオフィスが、11月30日、無事最終日を迎えました。終わってみればあっという間の3ヶ月でしたが、たくさんの上京区にお住まいの皆さん、そして関係者の皆さんのおかげで、様々な取組を行うことができました。

木・金・土・日・祝の開館でしたので、3ヶ月と言っても実質49日間でしたが、総勢800人以上（平均約16人／日）の来客に恵まれました。9月はまだ残暑が厳しく、しかも蚊も多い！窓を全開にして蚊取り線香をお香のように焚いていましたが、月が変わるにつれ窓を閉め、厚着をし、最後の10日は小さな電気ヒーターのお世話になりました。

このオフィスは何もない教室から始まりました。センターのような冷暖房はないし、電話もない（電話料金に限りのあるプリペイド携帯電話を使用していました）、インターネットもコピー機もないオフィスです。通常仕事をしている時には当たり前のように使用していた文明の利器はMISOにとっては贅沢品。でも、成せば成るというか、なけりゃないのやり方というか、文明の利器に囲まれていなくても仕事はできましたし、上京区にお住まいの方々と交流することに全く問題はなかったということが、とても不思議な感覚でした。

そんな中で取り組んできたいくつかのことを報告します。

まずは「京町家まちづくり調査」。平成22年３月まで行う、京都市全域を対象にした調査がＭＩＳＯを拠点としてスタートを切りました！

10月19日（日）晴れ　午前９時０分、京都市内外から約40名の調査員がＭＩＳＯに集結。西陣地域住民福祉協議会吉川哲雄会長のご挨拶で１年半に及ぶ調査が幕を開けました。また、西陣まちかどアルバムを使った、「西陣はこんなところ」といった話が同じく西陣地域住民福祉協議会の高橋孝三さんからありました。「西陣の文化を育んだ器が京町家！」なのだと。西陣のことを全然知らない調査員さんにとっては、調査をするときの良い視点ができたのではないでしょうか。

次に「町家＆まちづくり相談」。せっかくサテライトオフィスを設置したので、できるだけたくさんの上京区にお住まいの方々の声を聞くのが、ＭＩＳＯにおいて最大の目的でした。

３ヶ月の間の町家相談32件（うち専門相談３件）、まちづくり相談２件。

特に西陣学区にお住まいの方は、別件で小学校に来られるついでに、ひょこっと顔を出してくださり、日々考えておられるまちのこと、町家のことを話して下さいました。

≪とある日のまちづくり相談　ＭＩＳＯブログより≫

日々の出来事はブログに書き綴っていました。

嬉しい来訪者
9月からMISOをはじめ、今はまだ周知期間。
それでも、ちょっとずつ西陣の皆さんに存在を知ってもらっているなぁと実感しています。
最近の来訪者にこんな方がおられました。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・
「ちょっと寄ってみた（＾＾）」
と言い、常々思っていることをお話してくださいました。

高度成長期以降、美しい木造の町並みが、ビルに侵食されている京都のまちなみ、景観の将来を心配して、自分も何かできることがないかなぁ、、、
と考えていらっしゃる方でございまして、
戦後、経済が豊かになっていくのに、それに反して景観が汚くなっていくなんて悲しい話だなぁと。。。
町家が絶対的に素晴らしくて、これを残すこと＝景観保全　なんて考えていないけれども、
新しい建物を建てるにしても、周りとの調和を考えられる「気遣い」があれば、、、、とお話しておりました。

そして、
「そういう取組みの仲間に入れて！」
と！！！

はい！是非入ってください♪

というか、そういうことを皆さんと一緒に考えていきたくてここに来たのですから！
・・・・・・・・・・・・・・・・・・
景観を守っていくために、地域のルールづくりをすることもできます。
景観法ができて以来、ルールを作ったら、法的に位置づけることも可能です。
でも、このルールづくりは私たちが勝手に作るものではなく、地域の良さを一番よく知っていて、
日々暮らしていらっしゃる住民の方々が考えて、その地域に一番良いルールをつくっていくものです。

しかし！！そのためのお手伝いなら精一杯します！！！
ということで、「ちょっと寄ってみた」が何かの始まりになればよいなぁ、、、と思います。

それにしても、これは地域にお邪魔しているからこそ聞けた話ですね。
ふらっと寄れるところにまちセンがいることに、意味があるのかも！とにんまりしてしまった私でございました。

《木下》

そして、10月頃から取組を始めた「西陣まちかどアルバム」。西陣学区の方々と一緒に、西陣の歴史が写っている写真をパネルなどに整理し始めました。

西陣まちかどアルバムの一例

元西陣小学校の資料室には寄贈された多くの写真があります。江戸末期の小学校や西陣織が写っている写真は、元々西陣学区の方が撮ったものだそうです。せっかくなので、その写真を何枚か抜き出し、西陣学区をよく知る住人さんにその写真からわかる歴史についてお話しいただきました。それをパネルにして廊下に展示していたのですが、これがとっても好評！。老若男女を問わず、多くの方が見入っておられました。ある30代前半くらいのお父さんがふらっと通りがかり、じーっとパネルとにらめっこ。「ねーねー、お父さん、何しているの？」娘さんが服の端を引っ張ると、「ん～。ここ（西陣）のことを見ているの」と、娘さんの誘惑にも負けず西陣織のパネルを見ておられました。

色々なセミナーも開催しました。元西陣小学校や周辺町家を使った、「町家所有者・居住者の集い」や「京町家専門相談員研修会」、ＮＰＯ法人京町家・風の会やすまいづくりセンターとの共催によるセミナーも実施しました。

京町家・風の会のセミナー風景。

「町家所有者・居住者の集い」では、10月に「木造とシロアリ」について日々研究されている京都大学の先生に最新の木造住宅の考え方や、シロアリ対策などを聞き、11月は所有者・居住者同士が集まり、京町家を受け継いでいく為に自分たちができることってなんだろう！？と意見を交わしました。ＮＰＯ法人京町家・風の会主催のセミナーは、９月に「伝統的木造建造物の耐震性と倒壊後の取組体制における課題」と、11月に「町家に暮らしてみませんか？～町家賃借のポイント～」というテーマで開催されました。11月のセミナーでは、これから住もうと考えておられる20代の方が多く参加され、代表理事である井上信行さんから、町家の種類、探し方、チェックポイント、地域の特色など、ていねいに教えていただきました。

～11月の京町家・風の会主催セミナーより～
★居住専用の仕舞屋（しもたや）はお商売しもうたもの（仕舞ったもの）。
★賃料は、物販その他の利用に比べ、飲食業は高い！不思議。
★借家は大家さんの大切な財産です。
★町家は定期借家契約が多いです。期限付きということを理解した上で住みやすいように工夫しましょう。

そして最後に、この３ヶ月で最もたくさんの人が集まったイベント「京都で「町家」なワケ」。ＭＩＳＯの交流イベントとして、西陣エリアにある㈱淡交社との共催で、西陣めぐり＆トークセッションを開催しました。第一部では全10コースの散策コースからお好きなコースを楽しんでもらい、第二部では町家に住まい、日々楽しんでおられる方々の「生」の話をお聞きしました。

「こ」のコースは、センター事務局次長の案内でした。

10月25日（土）、前日の雨が嘘のような青天の午後、91名という多くの方々が、西陣めぐり＆公開トークセッションを楽しみました。

淡交社が出版する「キョースマ！」で事前告知をしていただいたおかげもあり、他府県の方もチラホラ。驚くことに、ブラジルの方の参加もありました。西陣めぐりでは西陣の文化、町並み、町家などなど、、、案内人さんの楽しい話を聞きながら貪欲に西陣を歩きまわる濃い２時間だったようで、西陣めぐりの後にＭＩＳＯに戻ってきた参加者さん達は少々ぐったり気味。でも、休憩をはさんでトークセッションが始まると、軽快な話しぶりに自然に耳が傾きます。「ぼろくて寒くて不便」な町家が、何故こんなに魅力的なのか？

第二部のトークセッション。学校の作法室で行いました。

「町家だから」の人づき合い、不便を楽しむ豊かさ、住みこなす楽しさなど、私達の生活にとって忘れてはいけない大事なメッセージを受け取りました。

これらのＭＩＳＯから生まれた「きっかけ」を大切に、新たな一歩を踏み出したいと思います。

（木下良枝）

京町家の保全・再生の取組

みんなの居場所としての おおらかな器「でまち家」

～同志社大学　京町家を拠点にした異世代協同プロジェクト　その2～

「ここは何？児童館？公民館？・・・」私が初めて「でまち家」に行ったときの第一印象でした。ミセニワでは、地域の人と大学生が座り込んで話をしています。オクドサンが残るハシリに入ると、オクから楽しそうな子どもたちの声が聞こえます。

でまち家外観

「でまち家」は、同志社大学の取組である「京町家を拠点にした異世代協同プロジェクト」として今年 4月にオープンしました。学生がライフスキル（社会性や人間力）を高めるために、町に出て「子ども」「大人」「高齢者」との関わりの中で活動・生活をする場です。

茶道サークルによるお点前披露

同志社大学邦楽部の邦楽演奏会

手話や茶道、英語等を皆で学び合う「町家サークル」や、地球温暖化問題等を考え、議論を交わす「井戸端会議」、歳時記に合わせた「季節のイベント」などが開催され、たくさんの地域の方が参加しています。運営は、スタッフとして登録している学生が行っています。

ここにはイベントがある時もない時も、いつも地域のいろいろな人が出入りしています。近くの京極小学校の子どもたちは、学校が終わると「でまち家」へやってきます。スタッフの学生は、小学校の全校生徒約150人のうち、およそ2/3の子どもの顔がわかるそうです。一度に70人くらいが遊んでいた日もあったとか。毎日「でまち家」にやってくる地域のお兄さんは、子どもたちと一緒に遊んだり、店番をしてくれたりしています。

手話サークルによる手話劇の発表

みんなから「でまち家のおかあさん」と呼ばれている学生支援課の小宮さんは、「でまち家」のことを「大きな友達の家」と説明されています。「ここは理念や何かを教えるための塾とは違う。契約や目的のある場ではない。利用者を限定する場でもない。ここにはいろんな人がいて、いろんな価値観がある」

「でまち家」として生まれ変わる前、この町家は、古材文化の会が主催している伝統建築物保存・活用マネージャー養成講座の題材として取り上げられました。研究の結果、幕末の大火（1864年）の後に、建てられたものだろうと想定されています。ここで育ち、現状をできるだけ残した形で活用してもらうことを望んでいた家主の中川さんと、町家を探していた同志社大学がタイミングよく出会われました。中川さんは東京にお住まいですが、月に１、２回は来られて、「でまち家」での時間を楽しまれ、ときには季節のしつらえをして、学生や地域の人にこの町家の新たな魅力を教えてくださいます。

現代において、このような場は大学生のみでなく、地域の人や子どもたちにとっても、とても貴重なところなのかもしれません。ここに来た人は皆、「実家に来たみたい」と言って、なかなか帰らないのだそうです。

「町家には包容力がある」「そんなおおらかな器であるからこそ、いろんな人をあたたかく受け入れてくれるのだろう」といった中川さんと小宮さんの会話が印象的でした。

（浜谷冨美子）

京北の魅力を学び・伝え・活かすための「スタディツアー」

京都市右京区の北部に位置する京北地域は、市内でも有数の自然環境、美しい景観、豊かな文化をもつエリアです。総面積の９割以上を山林が占め、古くから京都の住宅や神社仏閣などの建材や土木用材の供給地として林業が発展してきました。緑豊かな山々と広がる田園、清流に沿って続く北山杉の美林が美しい里山の風景を生みだしています。また、平安京以来、旧京都市域との歴史及び文化のつながりが深い地域であり、遺跡や文化財など歴史的な史跡を数多く残しています。中でも、常照皇寺などの名刹をはじめ、明治維新の際の山国隊の軍楽など、優れた歴史的文化遺産が今も受け継がれています。一方で、人口減少が加速し、高齢化による地域の活力不足が懸念される中、団結した地域運営が一層必要になっています。今後、地域の環境や景観を保全し地域の活力の向上を進めていくためには、「京北の魅力はどんなところにあるのか」を様々な視点から再発見していくことが大切です。

少子高齢化による後継者不足等で農地の荒廃や管理されていない山林の増加が進んでいます。

これまでも、「ふるさと京北再発見」（第一集・第二集各1000円、センターでも販売中）の発行など、地元の諸団体によって、貴重な自然環境の紹介、農林業に関わるイベントの開催、茅葺き民家とその住文化の情報発信されてきました。そして今、これらの活動内容を応用して、「スタディツアー」のプログラムづくりに皆さんで挑戦されています。

「スタディツアー」は、地元住民主体の活動組織「NPO法人ふるさと京北鉾杉塾」、京都大学工学研究科都市環境工学専攻居住空間学講座、京都建築専門学校町家研究室、京都府立ゼミナールハウスが連携して企画し、今年度は、大学コンソーシアム京都の「大学地域連携モデル創造支援事業」の助成を受けています。京北の地場産業・民家・食文化といった学ぶべき主題をピックアップし、地元住民が直に地域の紹介をすることで、参加者に地域の魅力を発信するプログラムづくりを目指しています。京北地域外の人へ魅力をPRすることに加え、プログラムの企画・運営を通じ、地域住民一人一人がその魅力を再認識し、各集落での地域づくりにつなげていくことが大きな目的です。その一環としてモニターツアーが企画され、11月15日（土）に実施されました。ツアーには、建築や林学、まちづくりなどを専攻している10名の学生がモニターとして参加され、センターからも同行させていただきました。

丸太の皮むきの実演

バスに乗り、第一の見学先「京北銘木生産協同組合」に向かいました。磨き丸太の保管倉庫を見学させていただくとともに、現場の方から林業の厳しい現状についてお話を伺いました。北山杉丸太の皮むきの実演では、職人の方の手さばきに、参加者は興味深く見入っていました。

小カブ畑

今木邸にて民家の歴史を聞く

次に、京都府の伝統野菜に指定されている「小カブ生産地」を見学し、農協の方からは、漬け物やサラダにしておいしい小カブの魅力や、耕作放棄地の増加や鳥獣被害といった農業の課題についてお聞きしました。昼食後、京北の代表的な民家である「河原林邸」や「今木邸杜の館」を訪問しました。「河原林邸」は、立派な茅葺き屋根やおくどさんを今に残しています。その茅葺きは、20年に一度葺き替えられ、費用は500万円ほどもかかるそうです。「茅葺きやおくどさんを残している理由は、こだわりだけなんです」と話される河原林さん。地域の生活文化を継承する熱意と苦労を感じました。「今木邸杜の館」では、囲炉裏を囲んで、管理人さんから家の歴史や現在の使われ方をお聞きするとともに、立派な家の造りを見学しました。

最後に、皇室との縁も深い中江集落を散策した後、山国神社にて時代祭にも登場する山国隊のお話を軍楽保存会の方から伺いました。

中江集落の民家

集落を散策する参加者

参加した学生モニターからは、「きれいな風景に感動した」、「北山杉丸太や茅葺き民家など、今まで知らなかったものを見れてよかった」という感想が聞かれました。また、「見るだけでなく、体験できるプログラムだと一層良かった」、「いいものがあることがまだまだ発信されていないのが残念」といった声もありました。

今後は、モニターツアーの結果を踏まえて研究会を開催し、「スタディツアー」の本格的な展開に向けた検討と地域資源のさらなる掘り起こしや管理に関するディスカッションを始めていくそうです。地元の諸団体の垣根を越えた有機的な取組が進めば、京北の自然、文化、人の魅力が京北内外に伝わり、地域づくりがさらに進んでいくことになるでしょう。

（上田萌子）

子どもに地域への愛着を育む
～こどもまちづくりセミナー～

センターでは、地域の歴史や生活文化を大人から子どもに伝えたり、地域の大人と子どものふれあいの機会を創出することで、子どもの地域に対する愛着を育み、子どもとまちとの関わりが豊かに持続し、地域の活力をつくる応援をしています。地域や小学校とのパートナーシップにより実施した2つの事例を紹介します。

■有隣ふれあい地蔵盆での「有隣子ども検定」

◇日　　時　平成20年8月31日（日）10時～12時半
◇実施主体　有隣自治連合会
◇場　　所　元有隣小学校内
◇参 加 者　有隣学区在住及び洛央小学校に通う児童と保護者
◇協　　力　京都文教大学学生ボランティアグループ
　　財団法人京都市景観・まちづくりセンター

有隣子ども検定

有隣ふれあい地蔵盆は、マンションに住む子どもたちやお地蔵さんのない町内の子どもたちにも、地蔵盆に参加する機会を与えてあげたいとの思いから、有隣学区で毎年実施されています。今年は洛央小学校にも参加を呼びかけられ、子どもだけで例年の倍の70名以上の申し込みがありました。例年どおり、福引きや輪投げ、かき氷等のコーナーのほか、今年度は新たに、有隣の子どもたちに有隣学区のことを知ってもらい、有隣の大人とのふれあいの機会をつくろうという思いから、「有隣子ども検定」を京都文教大学の企画によって実施されました。

いちょう館に散りばめられたクイズのヒント

クイズに挑戦する親子連れ

和やかなインタビュー風景

いちょうの木が完成

子どもたちは、有隣小学校の歴史や学区の活動を紹介した「いちょう館」という資料館にある資料に基づいて出されるクイズや、地域の大人へのインタビューによる質問に挑戦します。インタビューの答えは、いちょうの葉をかたどった解答用紙に記入し、いちょうの幹を描いたパネルに貼り付け、みんなでいちょうの木（有隣学区のシンボル）を完成させる、というプログラムです。

低学年の子にはクイズがちょっと難しかったかもしれませんが、子どもたちからは、有隣学区のことが少しわかったという声が聞かれました。

有隣学区の大人の皆さんが子どもたちのインタビューに一生懸命答えている姿が印象的でした。

小学校低学年用問題例

・有隣小学校はいつできたでしょう？
　A　1869年　B　794年　C　好きやねん
・有隣小学校の校章の羽の数はいくつでしょう？
　A　15本　B　19本　C　羽はない

小学校高学年用問題例

・有隣小学校を作ったのは誰でしょう？
　A　京都市長　B　有隣学区の人々
　C　アメリカ大統領
・有隣学区の人々が作っている情報誌の名前は？
　A　あいらぶゆうりん　B　らぶらぶゆうりん　C　あいらぶゆうこりん

インタビュー問題例

・有隣学区の良いところをたずねるべし。
・有隣学区のオススメの場所を調査するべし。

■東山区新門前通西之町での「白川だいすキッズ西之町探検隊」

◇日　　時　平成20年9月20日（土）　9時30分～12時
◇実施主体　京都市立白川小学校
　　財団法人京都市景観・まちづくりセンター
◇場　　所　元有済小学校（レクチャーと作品制作）
　　新門前通西之町（まち歩き）
◇参 加 者　白川小学校3年生17名と保護者
◇協　　力　有済連絡協議会会長、西之町まちづくり協議会、下京青少年活動センターでボランティア活動をされているメンバー、京都意匠文化研究機構

新門前通西之町は、知恩院の門前町として発展し、「古美術のまち」として知られ、昔ながらの風情が現在も残っています。小学校の統廃合に伴い、風俗店の進出による住環境への影響を心配する声が持ち上がったことを契機に、町並みを守るためのルールを地区計画制度を活用して策定（平成16年11月）しています。

その西之町を舞台に、地元白川小学校の3年生（白川だいすキッズ）が、総合学習の一環として、まち歩きや西之町の方々のお話をもとに知ったことや感想などを作品にするイベントが行われました。

① 出発前にクイズで地域を知る

出発地点となる元有済小学校においてスタッフ紹介やプログラムの説明の後、西之町の概略についてのクイズが出題されました。

準備物を確認

西之町のクイズに挑戦

西之町マップ

しれいボード

子ども達へのしれい

しれい1…Y家に行ってクイズに答える。
しれい2…6地点でクイズに答える。
しれい3…ひとり10枚、まちあるきの間に写真をとる。

② カメラ片手にまちを歩く

続いて、西之町のまち歩きをしました。班ごとに、茶店やお香屋さんなどの商店や、築100年以上の町家を訪ねました。商店ではお茶を混ぜるときに使う「箕」について、町家では箱階段や犬矢来などのクイズに答えました。また、ポラロイドカメラで商店や町家、町並みの気に入った場所を撮影しました。

お気に入りの写真をパチリ

Y家にて説明を受ける

お香屋さんからクイズ出題

しれいボードに答えを記入

③ 作品づくり

元有済小学校に帰ってきた子どもたちは、切手シートに見立てた台紙に、撮影してきた写真を貼りつけ、説明や感想を書いて、西之町のいいところや新たに発見したところをまとめた作品を完成させました。

写真にコメントを記入

切手シートの一例

イベントを終えて、子どもたちからは、「いろんなことが勉強になった」、「昔のいろいろな物があってびっくりした」、「西之町のことが知れて良かった」といった感想が聞かれました。特に、まち歩きと写真撮影によって、楽しみながら学ぶことができたようです。

子どもたちは大人とのふれあいの中で、楽しみながら地域を学び、大人の方も子どもたちに説明することによって、地域の良さを再確認されていました。子どもたちが自分の住んでいる地域に愛着を持ち、やがては地域社会の担い手に育ってくれるといいですね。

センターでは、このような取組を行う地域や小学校の応援をしていきたいと考えています。ぜひセンターまでご相談下さい。　（上田萌子）

景観・まちづくり大学を受講して（参加者からの声）

多くの市民の方にご参加いただいております「景観・まちづくり大学」では、まちづくりや京町家に関することなど、様々なテーマに沿ったセミナーを開催しています。１月以降も盛りだくさんの内容で開催していきますので、皆さんのご参加をお待ちしております。

まちづくり情報発信セミナー（平成20年10月12日）

「農業からアグリビジネスへ～ほんものと京都へのこだわり」講師：山田敏之氏（農業生産法人こと京都株式会社代表取締役）

参加者からの感想（G. Gさん）

この「から」にこめられた思いと歩み、そして理念のお話。ご実家の事情から余儀なくサラリーマン生活をやめて農業を継ぐことに。時代は化学肥料・農薬多用期から環境・健康重視の有機栽培への移行期、農業は発展してゆくのではないか。「私は農業をするために選ばれた人間ではないか」と「自分を高めて」。目標は年商1億。始めてみれば会社勤め時代は105日あった年休が当初は名目でも28日へ。周囲は「1億円を目指すなんてアホか」と。

栽培作物を葱に特化、さらに市場に顔を出しては価格の研究、販売商品を「カット葱」にしぼる。折からのラーメンブーム。ラジオや雑誌でラーメン店調べ。地元京都であえて価格競争するのではなく、販路の開拓は全国、特に東京で。会社勤め時代の営業経験を活かして、行く先全てのラーメン店で名刺交換、「業者の営業はよく来るが、農家が来たのははじめてだ」、興味をもって話を聞いて下さって。そして旬野菜の品評会で市長賞を受賞。安定した注文を確保。そこで、ものづくりの方をさらに頑張ろう。自らの鳥・卵好きもあって、受け入れの手を挙げてくれた美山で養鶏所をはじめ、美山の地域振興にも貢献しつつ、健康な鶏から高品質の有精卵を。これらすべての流れの中で培われてゆく人と人との縁、信頼関係。土、水、光、空気、そして心と心がつくり出す世界。会社の経営理念は「農業生産法人として人・自然に感謝し、心豊かに社会貢献します」。

さまざまな試行錯誤を経験され、その経験からさらに次の試行の種を得て。大地と人々の中にしっかりと根を下ろし広げながらふんばって、その人々同士、地域と地域を結びつけつつ育ってゆく会社。1本の葱も、1つの卵も1日にしてならず。とても厚みと深みのある、そして元気のでる栄養満点なお話、そしてひとつひとつの食べものありがたさ。いただきます、ご馳走さまでした。

11月上旬のある夕方、山田さんの畑をそっと訪ねて行ってみたら、青々とした たくましい葱たちの高い列が、遥か彼方までずらっと並んでおりました、秋空に向かってまっすぐに。

京町家まちづくり調査ただ今進行中！

京都市、立命館大学、京都市景観・まちづくりセンターの3者で行う「京町家まちづくり調査」は、10月19日に1年半に及ぶ調査のスタートを切りました。初日は晴天に恵まれた中、約40名の調査員が元西陣小学校に集合し、西陣学区の説明を受けた後、4名1チームとなって調査に繰り出しました。テレビクルー3社、新聞社1社も、調査員の後を追って取材に走りだしました。

京都の伝統的な建築様式や生活様式を伝え、現在も職住共存の暮らしの場である京町家は、歴史都市・京都の景観の基盤を構成するものであり、京都の持つ大きな魅力です。しかし、京町家は年間約2％の割合で失われています。そこで、多くの市民の協力を得て、残存する京町家の現状を把握するために「京町家まちづくり調査」を実施することになりました。

今年10月から来年1月までの調査では、元西陣小学校などを調査拠点に、上京区15学区、北区2学区の調査を実施し、約1万3千軒の調査が完了する予定です。11月24日の時点では、10回の調査で約4,300軒の調査を行いました。

ボランティア調査員の登録も順調で、専門家調査員83名、一般調査員205名（11月末現在）を数えており、これに立命館大学の登録スタッフ54名を加えて、調査を行っています。毎回40名程度の調査員とスタッフが4名で1チームを編成し、1日10チームで、約500から600軒の町家の調査しています。

2月からは伏見区の調査に入る予定であり、住吉、板橋、桃山、南浜といった伏見区中心部と、伏見街道、竹田街道、鳥羽街道、奈良街道沿いの調査を行っていきます。

私と京都

有隣自治連合会　会長
大田垣 義夫

「住民自治の伝統を受け継ぎたい」

私は河原町五条の近くに生まれ、昭和20年の半年足らず集団疎開のため府下の八木町で過ごしたことを除けば、72年間ずっと同じ所に住んでいます。

小さい頃は京都を意識することは余りありませんでした。「千年の都」は知識として持っていましたが実感はありませんでした。ただ、まちの造りが碁盤の目になっていて、南北の通りと東西の通りを座標軸に「○○通○○上る（下る）」という住居表示は極めて合理的だと感心したものでした。知らないところにもお使いに行けたからです。

昭和37年、新しい住居表示の法が出来たときにも、伝統の表示を変えなかったのは賢明だったと思っています。その時に、京都の町内会は通りを挟んだ向かい側同士の家々で構成されていることを改めて知りました。それまで当たり前と思っていたことが京都独特の合理性から来ていることを感じました。新しい住宅地では、通りで囲まれたブロックが1つの町内会になっています。地図にすると分かり易いかも知れませんが、毎日顔を会わす「向こう三軒」の方が別の町内というのはやはり不自然です。

その町内会単位に、新年互礼会、お千度詣り、地蔵盆、お火焚神事などが連綿と行われています。町内会の役員になれば「行わないといけないこと」として伝わっているものですが、これらの行事を通じて町内会の親睦と結束が保たれてきたことは事実で、今日の住民参加の諸行事が比較的スムーズに行われ、住民自治の基盤になっているのです。

昭和63年、元有隣小学校の創立120周年記念事業として、有隣同窓会が「有隣」の足跡を残そうと有隣同窓会資料室「いちょう館」を開設することになり、私はそれに携わりました（ＮＬ４３号参照）。今日の「学区」に当たる「番組」で、「番組小学校」としてよく知られている学校を、住民がお金を出し合い、土地を提供して、お互いの「番組」が競って建設しました。単に学校の機能だけでなく、消防、警察、役所など「番組」という住民自治の組織の核としての機能を併せ持ったものでした。

「学区」というと学校があっての学区ですが、京都では、元「学区」があってそこに学校が出来たわけで、これは大きな発見でした。今、自治連合会に携わっていますが、「有隣学区」というのは校区ではなく、住民の自治組織なのです。その核になるのが町内会であり、それを結ぶのが各種団体であり自治連合会なのです。町内会が伝統を守りながらも新たな住民自治の取り組みをしなければ自治連合会は活性化しません。

有隣学区には現在82棟のマンションが建っていますが、マンションの住民も自治組織である「有隣学区」の住民として町内会に関わらない限り地域力は高まりません。防災を糸口としてでもマンションを含めた自治組織が強化されることを念じて止みません。

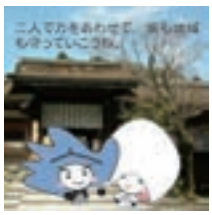
ものしりてらじぃやの解説

ワールド・モニュメント・ファンド（World Monuments Fund）

京町家の保全・再生を海外にも発信しようと、ワシはアメリカへいって来たぞ！その様子は2、3ページで紹介したのう。で、今回のてらじぃやの解説じゃが、ニューヨークでの公開フォーラム開催の一環として意見交換をしてきた「ワールド・モニュメント・ファンド（以下、WMF）」について紹介しよう。

1965年、ニューヨークに設立されたWMFは、国や文化の枠を越え、世界各地で政府や民間と協力し、文化的・歴史的観点から重要な建造物や遺構の保存を支援している国際民間組織じゃ。1966年の大洪水で大変な被害を受けたヴェネチアの建造物の修復への支援をはじめ、世界80ヶ国以上で様々なプロジェクトを指揮されてきた。その中には、クラクフ（ポーランド）のシナゴーグ、イースター島（チリ）のモアイ、アンコールワット遺跡（カンボジア）などがある。アンコールワット遺跡では、地元の人々に歴史保存技術のトレーニングもされておる。日本でも、2002年から広島県福山市鞆の浦の保存活動に支援を受けておるぞ。また、「ワールド・モニュメント・ウォッチ」といった、天災や戦争、国の経済状態の悪化などによって崩壊や消滅の危機にある世界中の貴重な遺産を、2年に1度、100ヶ所選び、広く世界に関心をもってもらうような活動もしておるのじゃ。

WMFでは、人類の資産に対して人々の関心が集まり、それぞれのプロジェクトに新たな展開が生まれ、さらに活動が広まっていくことを期待している、ということじゃ。



センターからのお知らせ

まちづくり、町家に関する相談を受け付けています

まちづくり活動や、町家の保全・再生・活用についてのご相談に、アドバイスや情報の提供を行っています。お悩みの方は、まず一度ご相談ください。

京町家まちづくり調査員募集

京都のこと、町家のことを学びながらボランティア

10ページで紹介しました「京町家まちづくり調査」にご協力いただけるボランティアの皆さんを募集しております。この調査は、京町家の保全・再生に関わる様々な課題を洗い出し、その解決に向けた制度や仕組みをつくるための基礎資料となるものです。調査にあたっては、まず、京町家や地域に関するミニ講座や調査方法を聞いていただいた後、各班に分かれて京町家の調査に出発します。

ご関心のある方は、お気軽にセンターまでお問い合わせください。また、センターのHPでも調査内容や応募方法などをご覧いただけます。

皆さまのご協力をお待ちしております。

■調査日時■

平成20年10月～22年3月の土日祝
午前9時～午後5時

景都（Kate）のつぶやき

いよいよ「京町家まちづくり調査」が始まりました。

京町家に精通する専門家の方々をはじめ、調査にご協力いただいているボランティアの皆さんには、毎回朝早くから集合いただき、感謝しています。朝7時前に、天気を気にするのは、子どもの頃の遠足以来でしょうか。時には小雨が降ってきて、調査員さんの指先が冷たくなったり、調査用紙が雨ににじんで見えなくなりそうになったり……。

参加いただいている方の中には、遠方からお越しの方や、すでに何度も参加いただいている方もずいぶんと多くおられて、京町家の認知度の高さだけでなく、京町家を残したいという思いの深さも感じます。

日本の地球の裏側、アメリカ・ニューヨークで、京町家の魅力を伝え、保全への支援を求める「京都創生海外発信プロジェクト」を開催しました。遠く離れた地で、歴史ある町並みの保全に力を注ぐ日米の著名な方々によって、京町家の魅力や保全について語られるということに、京町家の存在の大きさを知ります。

個々の京町家の状況を一軒一軒調べ、保全策を見出す「京町家まちづくり調査」と、京都の暮らしの文化である京町家の保全を訴えかける「京都創生海外発信プロジェクト」。いずれも壮大な事業ですが、京町家を大切に思う一人ひとりの心で成り立っているのだと、実感しています。（N・Y）

センター活動拠点のご案内

京都市景観・まちづくりセンター

〒600-8127 京都市下京区西木屋町通上ノ口上る梅湊町83番地の1（河原町五条下る東側）
「ひと・まち交流館　京都」地下1階
TEL 075-354-8701
FAX 075-354-8704
e-mail : machi.info@hitomachi-kyoto.jp
HP : http://machi.hitomachi-kyoto.jp

●開館日（相談の受付等）
9:00～21:30（月曜日～土曜日）
9:00～17:00（日曜日・祝日）

●休館日
毎月第3火曜日（国民の祝日に当たるときは翌日）
年末年始（12月29日～1月4日）

なお、センターへのお越しの際は公共交通機関をご利用ください。

平成20年度賛助会員の募集

京都のまちづくりに貢献したい！センターの活動を応援したい！そんなあなたの熱意をお待ちしています。

[特典]
- ニュースレター（年4回・季刊）の送付
- 冊子等センター発行物の割引
- ニュースレターでの活動紹介
- シンポジウム、セミナー等への無料優待
  景観・まちづくり大学のすべてのセミナーを無料で受講できます。（賛助団体の方はひとつのセミナーで3人まで受講可）

[年度会費]
個人1口：5千円　団体1口：5万円

まちづくりフレンズの募集

地域のまちづくりに関する各種イベントや啓発・学習活動にボランティア・スタッフとして参加していただける方を募集しています。

ニュースレター 京まち工房 第45号　2008年12月　編集・発行　（財）京都市景観・まちづくりセンター　印刷　日本写真印刷株式会社